慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連 : 通信制高校に通う生徒を対象とした調査から
Sub Title	Association between the consciousness of students who have experienced non-attendance and their prognosis : focusing on a questionnaire survey of correspondence high school students
Author	伊藤, 美奈子(Ito, Minako) 小澤, 昌之(Ozawa, Masayuki) 安田, 崇子(Yasuda, Takako) 星野, 千恵子(Hoshino, Chieko) 福智, 直美(Fukuchi, Naomi) 近兼, 路子(Chikakane, Michiko) 原, 聡(Hara, Satoshi) 鶴岡, 舞(Tsuruoka, Mai)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.75 (2013.) ,p.15- 30
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study is to investigate the association among consciousness of, support for, and prognosis of correspondence high school students. A questionnaire survey was conducted among students who had experienced non-attendance in junior high school. In their responses, students reported that the main reasons for their non-attendance were mainly "friendship" "learning", and "life rhythm". There were various factors in the students' non-attendance; some were introverted and others were rejective. There was a low-negative correlation between the number of non-attendance factors and the students' self-esteem score. In junior high school non-attendance students received support in the form of consultations from teachers and specialized agencies encouraging their motivation to attend and offering counseling. Nevertheless, students considered that their motivation was low despite this support. Students who indicated many non-attendance factors tende to negatively evaluate this support. According to the questionnaire results, about half of the students replied "not to return to non-attendance." In addition, their scores for "self-esteem"and "confidence in own future" were higher than those of ther students.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000075-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連

——通信制高校に通う生徒を対象とした調査から——

Association between the Consciousness of Students Who Have Experienced Non-attendance and Their Prognosis

——Focusing on a Questionnaire Survey of Correspondence High School Students——

伊藤美奈子*・小澤昌之**・安田崇子***・星野千恵子****・
福智直美*****・近兼路子******・原聡******・鶴岡舞****

Minako Ito, Masayuki Ozawa, Takako Yasuda, Chieko Hoshino,
Naomi Fukuchi, Michiko Chikakane, Satoshi Hara, Mai Tsuruoka

The purpose of this study is to investigate the association among consciousness of, support for, and prognosis of correspondence high school students. A questionnaire survey was conducted among students who had experienced non-attendance in junior high school. In their responses, students reported that the main reasons for their non-attendance were mainly "friendship" "learning", and "life rhythm". There were various factors in the students' non-attendance; some were introverted and others were rejective. There was a low-negative correlation between the number of non-attendance factors and the students' self-esteem score. In junior high school non-attendance students received support in the form of consultations from teachers and specialized agencies encouraging their motivation to attend and offering counseling. Nevertheless, students considered that their motivation was low despite this support. Students who indicated many non-attendance factors tende to negatively evaluate this support. According to the questionnaire results, about half of the students replied "not to return to non-attendance." In addition, their scores for "self-esteem" and "confidence in own future" were higher than those of ther students.
Key words: non-attendance, correspondence high school, self-esteem, prognosis, support

1. 問題の設定

高校生の不登校は義務教育ではないこともあり，中学生の不登校に比べ注目されることは少なかった。しかし近年，文部科学省においても高校の不登校対策がさかんに議論されるようになってきた。そ

* 奈良女子大学大学院人間文化研究科教授
** 青山学院大学大学院法務研究科助手
*** 慶應義塾大学大学院社会学専攻博士課程
**** 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了
***** 湘南学院高等学校教諭
****** 慶應義塾大学大学院社会学専攻修士課程

の背景には，高校中退，引きこもりなどの社会問題との関連も指摘される。2012年8月に文部科学省の発表によると，2011年度の高等学校における不登校生徒数は56,292人であり，在籍者数に占める不登校生徒の割合は1.68%であった（『平成23年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』）。高等学校の不登校調査を開始した2005年度以来2年連続して増加したと報じている（前年比1.1%増）。

このように増加傾向をたどる高等学校の不登校であるが，中学に比べるとその支援は決して十分であるとは言えない。スクールカウンセラーや適応指導教室などとの「連携」や「協働」の必要性が叫ばれるなど，不登校支援が手厚い中学校とは異なり，高校生は一度学校を離れてしまうとそのような支援を受ける機会が格段に減ってしまう。その結果，出席日数や欠課時数が規定を超えてしまい，原級留置や退学，転学を余儀なくされるというケースも多い。また，その後の進路情報に関しても，最近でこそ不登校生徒のための学校説明会等が開催されたり，インターネットでの情報が入手しやすくなったりしてきたものの，高等学校現場にまで十分に浸透しているとは決して言えない。生徒も教師も手探りで次の進路を探したり，不登校生徒に対応したりしているというのが現状であろう。

2.　先行研究と研究課題

2.1　高校生の不登校支援をめぐる議論と現状

高等学校に比べると小学校・中学校では，早くから「不登校（登校拒否）」が注目され，様々な対策が講じられてきた。小中学生の不登校は1996年度に前年度よりも15%増加し，現行の調査方式になった1991年度以降で過去最高になってから，その後数年間増加し続けていた。そのような折，当時導入されつつあった「スクールカウンセラー制度」に注目や期待が集まり，2001年度には〈試行期間から制度化へ〉という大きな転機がみられた（伊藤，2000）。また，2008年度には一部の小学校にもスクールカウンセラーの配置が開始された（伊藤，2009）。

しかし，高等学校の「不登校」への対応は，スクールカウンセラー導入当初から大きな進展はみられない上に，不登校生徒への進路指導は個々の担任教員が悩みながら行っているのが現場の実態であり，義務教育終了後には，さらに生徒への支援が手薄になる。高校生の不登校の実態は詳細に把握されていない（水田，2007；小泉，2006）という指摘もあるように，専門家の間においても高校生の不登校については十分な検討がなされていない。さらに，高校生の不登校は「高校中退」「貧困」「ひきこもり」に関連するという指摘（青砥，2009；池谷，2008；斎藤，1998，2007など）もあり，早い段階で対処をしなければ，その後の社会生活が困難になるという危険性を少なからずはらんでいる。

とくに昨今，不登校を受け入れる高校やそれに準ずる学校が急増する中，不登校経験者の「その後」の進路は多様化しつつある。不登校経験者の進学先における予後については，定時制高校生徒（紅谷，2000）や通信制サポート校在籍者（稲垣・和気，2007）を対象とした調査研究があるが，調査実施の難しさもありデータ数は十分ではなく，多様な受け入れ校を横断的に見渡した研究はまだ行われていない。また，それら進学先での不登校経験者向けの支援については，広島県立尾道高等学校通信課程での「ソーシャルスキルトレーニング」や，広域通信制高等学校である第一学院高等学校での「キャリア・サポートプログラム」など，コミュニケーションや人間関係を学ぶための実践プログラムを提供している学校も増えている。ただ，その実態と成果については，まだ十分に解明されていない。そういう意味からも，高校段階における「不登校」に関する研究の蓄積は急務であると考えられる。

2.2　中学校卒業後の不登校に関する研究

義務教育期間後の不登校への対応とその「予後」については，これまで精神医学における予後調査（門，1994；大高ほか，1986；渡辺，1983など）が主であった。これら医療現場における追跡研究をレビューした齊藤（2000）は，不登校の予後について「数年以上の長い経過で見ると不登校の子どもの70 ～ 80％は社会的に良好な適応を示すようになるが，20 ～ 30％ほどは社会的適応の難しい不安定な状態にとどまるものがある」という見込みを示している。

質的データをもとに分析した研究として，高橋（2010）は，3人の不登校経験者の語りについてPAC分析を用いて考察した結果，「自分の居場所を見つけること」や「友人と関係を深めること」が，不登校経験を肯定的に意味づけするきっかけになることを示唆している。また田中（2009）は，高校入学と同時に体調を崩し不登校となった高1男子生徒が，やりたいことを探し，進路形成をしながら，留年しつつも再登校したケースについて報告し，「高校生の時期の不登校への対応の際には，キャリアの発達を求めるアプローチも有用」であると述べている。川俣・河村（2007）は，中学で長期不登校を経験し，高校入学時から不適応傾向を示していた生徒に対してカウンセラーが生徒に対して「学校での居場所」を提供し，他の教師へ援助関係を広げていくことが「対象生徒の対人不安の軽減」と「学校での活動意欲を高めることに有効であった」と報告している。さらに山本・齋田・大月（2009）は，青年期課題を抱えた高校生が不適応状態になりやすいという先行研究の知見をまとめ，不適応を起こし学校を欠席がちな男子生徒との心理相談過程の事例を報告している。本生徒は「自己に対する否定的な見方が根強く劣等感を感じていた」生徒であったが，「自我同一性の葛藤」に向かい合い，大学受験を経験し，肯定的な自己像を描けるようになったという。

これら事例を中心とした報告に対し，学校への進学や適応に焦点づけて行われた調査研究も，わずかながらある。主たるものとしては，適応指導教室通室者（本間・中川，1997）や不登校学級卒業生（村田・三浦・武田・林・朝倉・伊藤・郡司，2000）に対する研究など，特定の機関への通室者を対象とした追跡調査が挙げられる。他方，大規模な全国調査としては，中学3年時に不登校を経験した者を対象とした森田（2003）の追跡調査がある[1)]。森田（2003）によると，就学も就労もしなかった者と比較して，仕事であれ学校であれ，社会的な所属先を持つ者の方が，自らの出会いや経験を評価し，その経験が将来の生きる自信につながることを指摘した。しかし学校卒業後，学校にも仕事にも所属しなかった生徒の中には，その後も自分の居場所を見つけられずにいる者の割合が高くなるとされる。したがって，若者にとっては仕事・学校を問わず，社会とのつながりの糸（social bond）を結ぶことが重要であると考えられる。以上のように，中学校時代に不登校であった子どもたちがその後何らかの“所属”につながるかどうかは，その後の生き方を予想する上で重要な観点になることが示唆されたといえる。

2.3　不登校と自尊感情

自尊感情に関しては，多くの研究が蓄積されている。たとえば，自尊感情が高いものは抑うつ感が低く（Tennen & Herzberger, 1987），学業成績が優れ（Hattie, 1992），対人関係のあり方もいい（Griffin & Bartholomew, 1994）と言われる。その一方で，いじめ被害者の自尊感情は低い傾向にあるという指摘もあり（Cajjaghan & Joseph, 1995; olweus, 1992等），自尊感情の高さは健康や適応の指標と考えられてきた。

不登校は学校現場における不適応の一つと考えられ，心理臨床現場での支援実践からも，不登校をし

ている児童生徒たちがさまざまな形で，自己否定・自己嫌悪・自信のなさ・居場所感の低下という感情を有していることが確認されている（伊藤，2009）。調査研究でも，公立中学校に登校する1,046人と不登校を理由に養護学校（特別支援学校）に転入・在籍している42人を対象に調査した粕谷・河村（2004）によると，不登校群では，一般群に比べて自尊感情が低いことが実証されている。

確かに先行研究の知見からは，自尊感情の低下と不登校との間の因果関係は解明されていないものの，児童生徒が不登校を経験する過程と自尊感情の低下との間には，大きな関連性があることは確かであると考えられる。これらに対し，伊藤（印刷中）では，中学校時代に不登校を経験した生徒が主に進学するとされる高校（チャレンジ高校）の生徒を対象に質問紙調査を行った結果，高校に入学した後の自尊感情得点は，チャレンジ高校の生徒（不登校経験者）もほかの高校所属の生徒（不登校未経験者）も，大きな得点差はみられないことが示された。この結果から，不登校状態と自尊感情の低下とは関連しているが，自尊感情は，その後の経過によって回復する見込みのあることも示唆されたといえる。

2.4 本研究の目的

そこで本研究では，中学卒業後のさまざまな進路についての実態を踏まえつつ，不登校支援の充実した通信制高校に通う生徒を対象にした大規模調査を実施し，生徒における高校進学以前の不登校経験と，高等学校に入学した後の生活意識の関連性に着目して考察を行う。

本研究における目的は以下の通りである。高校進学以前の不登校経験（不登校になったきっかけ，当時の症状，中学校で受けた支援内容）と，現在の不登校に対する意識および現在の適応を見るために自尊感情を調べる。それらの関連性を分析することにより，不登校経験者の視点から見た支援の実際について検討を行う。

3. 方 法

調査時期：2012年1月～2月。

調査対象者：全国に約40校を有する広域通信制高校の週5日コースに通う生徒2617名（回収率58.0％）。学年別にみると，1年生は男子555名（53.2％）・女子489名（46.8%），2年生は男子534名（54.4%）・女子447名（45.6%），3年生は男子336名（59.6%）・女子228名（40.4%），不明28人であった。全体の平均年齢は，16.68（SD=.885）歳であった。そのうち本研究では，中学校時代に不登校を経験した1,671名を対象とする。

調査方法：ホームルームなどを利用し，担任教師から配布・説明が行われ，回答を求めた。本人の了承が得られた場合のみ回答を求め，回答の途中でも回答を拒否することができる旨が担任教師から説明された。

調査内容：①自尊感情尺度（東京都版）22項目（附表1参照）：「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法。〈自己評価・受容〉〈関係の中での自己〉〈自己主張・決定〉の3因子からなる。それぞれの項目得点を合計し項目数で除した値を，自尊感情3得点として扱う。②将来展望に関する尺度（都筑，2009）。将来についてどれくらい展望があるかを測定する尺度を用い，伊藤（2012）により抽出された因子「将来への自信」のみを使用する。「どんな困難が生じても，将来うまくやっていく自信がある」「自分の将来を自分の力で切り開く自信がある」という6項目からなる。4件法で実施した。これも，項目得点を合計し項目数で除した値を〈将来への自信〉得点とする。以下は，不登校経験者のみに

尋ねた項目である。③不登校になったきっかけ（FIGURE 1参照）：文部科学省の学校基本調査で用いられている項目を採用し，あてはまるものを複数回答で求めた。④不登校をしていた時に抱えていた症状について，「ひきこもり」「無気力」「身体症状」「うつ状態」「家での暴力」「昼夜逆転・生活の乱れ」の中から，あったものすべてを選択するよう求めた。⑤不登校であった時に中学校で受けた支援について：鶴岡（2012）により作成された項目を使用。FIGURE 2に挙げた項目について，「受けていない」「大いに役に立った」「ある程度役に立った」「あまり役に立たなかった」「まったく役に立たなかった」より選ぶよう求めた。⑥不登校についての意識：高校生になって不登校をどう思っているかを問うもの：「不登校には戻らないだろう」「いつ戻るかわからない」「考えないようにしている」の選択肢から1つ選ぶよう求めた。ほかに，フェイスシートでは，学年・性別・年齢を尋ねた。

4. 結果と考察

4.1 不登校になったきっかけ

不登校になったきっかけについては，FIGURE 1に示すように，最も選択率が高かったのは「友人との関係」で，これのみで過半数（53.5%）を占めることがわかる。これ以外にも，学校現場での人間関係である「先生との関係」や「クラブや部活動の友人・先輩との関係」も2割を超えることがわかる（それぞれ25.5%，23.8%）。さらに，「勉強がわからない」も32.8%に達した。「勉強がわからない」と回答した生徒の中には，学習障害やADHDなどによる学習遅滞を原因とするものが，ある程度含まれるものと考えられる。

一方，2割には届かない（19.6%）が，「入学，転校，進級して学校や学級になじめなかった」も多い。〈中1ギャップ〉と言われるように，学校環境の変化が不適応や不登校の背景要因として指摘されることを裏付ける結果となった。また，26.2%が選択したものに「生活リズムの乱れ」がある。11.2%を占めた「インターネットやメール，ゲームなどの影響」とも関連するだろうが，昼夜逆転と不登校とは大きなつながりを持つことが示唆された。しかし，ネットやゲームにのめり込むことが不登校の原因なの

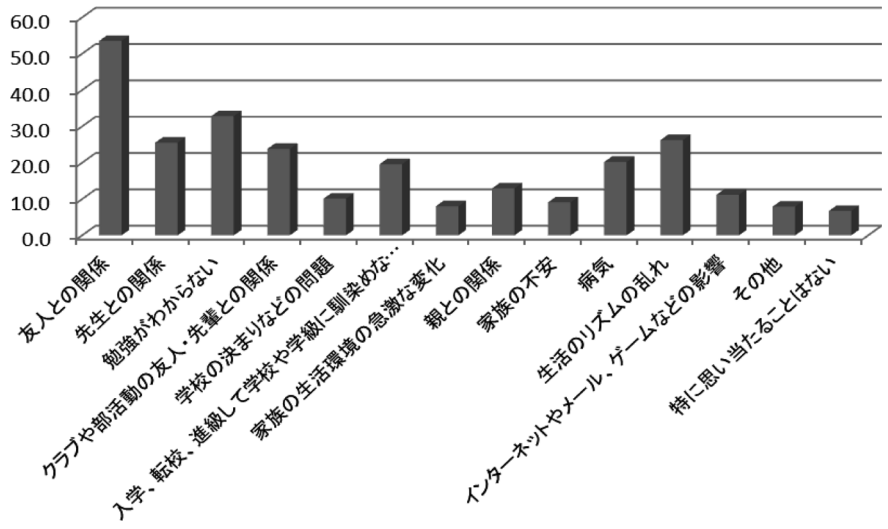

FIGURE 1　不登校になったきっかけ（複数回答%）

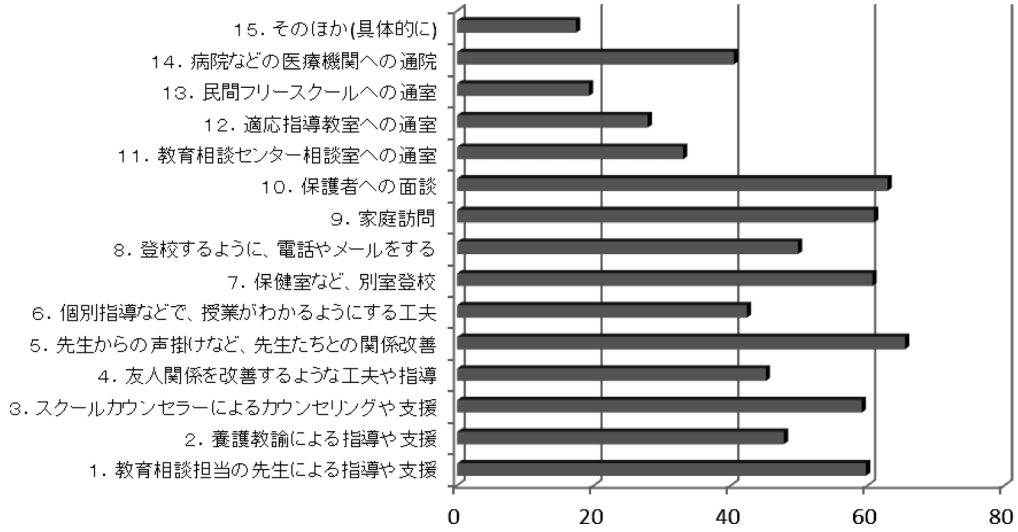

FIGURE 2　中学校での支援を受けた比率%

か，それとも，不登校になって家で過ごす時間を埋めるためにネットやゲームに依存してしまうのか，その因果関係は定かではない。ただ，ゲーム依存や昼夜逆転のように，乱れた生活を送ることと不登校と間に一定の関連性があることが確認されたといえる。他方，「特に思い当たることはない」についての選択率は1割に満たなかった。

4.2　中学校で受けた支援について

6割前後のものが「受けた」と回答した支援は，以下の6項目であった（FIGURE 2）。多かったものから順に「先生からの声かけなど，先生たちとの関係改善」「保護者への面談」「家庭訪問」「保健室など，別室登校」「スクールカウンセラーによるカウンセリングや支援」「教育相談担当の先生による指導や支援」であった。一方，教育センター相談室や適応指導教室，民間のフリースクールなど，学校外の相談機関への通室は2割弱から3割前後に留まっていることから，不登校への対応が，主に学校内で行われることが多いといえる。

またこれらの支援を受けたものによる有効度を見ると（FIGURE 3），〈大いに役立った〉〈ある程度役立った〉とを合わせると50%を超えたものには，「保健室など，別室登校」「保護者への面談」「スクールカウンセラーによるカウンセリングや支援」「教育相談担当の先生による指導や支援」「養護教諭による指導や支援」「民間のフリースクールへの通室」があった。他方，有効度が低かったのは「友人関係を改善するような工夫や指導」「登校するように，電話やメールをする」「家庭訪問」であった。上記の結果から，不登校時の生徒にとっては，電話や家庭訪問のような積極的な登校刺激は，あまり歓迎されないことが示唆される（この結果は，先行研究（伊藤，2006）とも合致している。しかし，これは不登校の渦中にある子どもの意識であり，これがそのまま家庭訪問の有効性を反映するものではない点にも注意が必要であろう）。また，担任教師のような，生徒にとって本来親しい関係にある立場の者よりも，養護教諭やスクールカウンセラー，教育相談担当のような，クラスや担任教師から一定の距離がある立

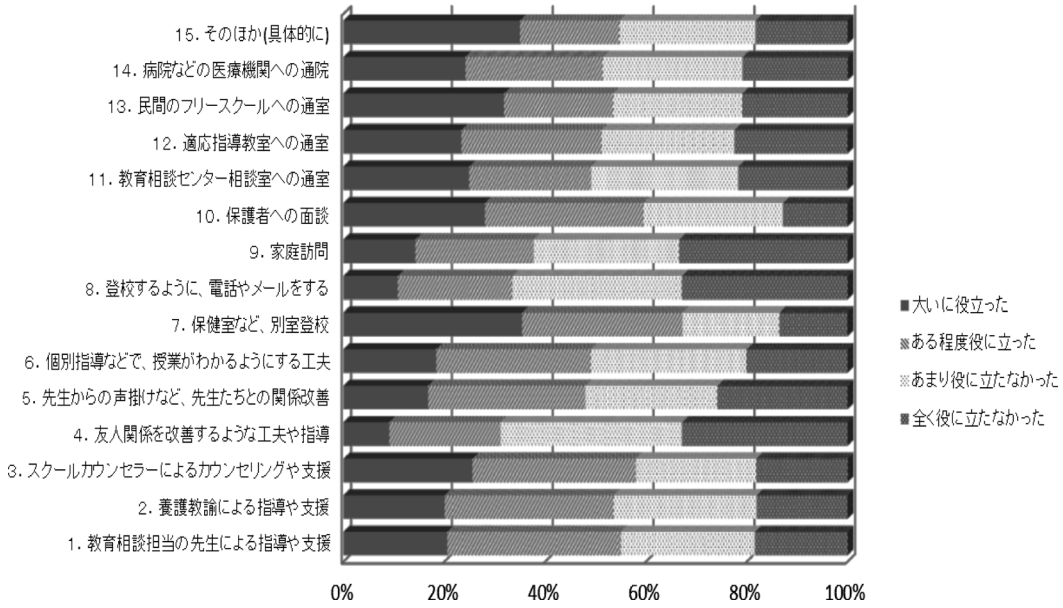

FIGURE 3　中学校での支援に対する有効度

場の方が不登校時の生徒は相談しやすいと感じていることが明らかになった。

4.3　支援についての因子分析

中学校による支援14項目に対する回答結果をもとに，因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果，3因子が抽出された（TABLE 1）。

第1は「保健室など，別室登校」「スクールカウンセラーによるカウンセリングや支援」「養護教諭による指導や支援」「教育相談担当の先生による指導や支援」「個別指導などで授業がわかるようにする」の6項目で構成された。第1因子は，FIGURE 3での有効度の評価が比較的高いものにより構成されることから〈教育相談的支援〉と命名した。第2は「先生からの声かけなど，先生たちとの関係改善」「保護者への面談」「登校するように電話やメールをする」「友人関係を改善するような工夫や指導」により構成された。これら第2因子は，有効度の評価が低めのものが集まったことから〈積極的登校刺激〉と命名した。そして第3は，「適応指導教室への通室」「教育センター相談室への通室」「民間のフリースクールへの通室」「病院などの医療機関への通院」により構成され，〈専門機関へのつなぎ〉と名付けられた。それぞれの α 係数（信頼性尺度）は.822，.807，.663となり，第3因子ではやや低めであったが，ほぼ十分な信頼性が得られたものといえる。

4.4　受けた有効な支援と自尊感情や将来への自信との関連

次に不登校時に受けた支援の有効度3得点と，自尊感情3得点および将来への自信得点との相関を求めた（TABLE 2）。すべて大きな相関ではないが，1%水準で有意であることが確認されたものに注目する。ごく微弱ながらも正の相関が見出されたのは，支援3得点と〈関係の中での自己〉および〈将来

TABLE 1 中学校による支援14項目の因子分析結果（バリマックス回転後）

	Fac. 1	Fac. 2	Fac. 3
保健室などの別室登校	**.757**	−.041	−.066
スクールカウンセラーによるカウンセリングや支援	**.756**	−.126	.077
養護教諭による指導や支援	**.708**	−.018	.049
教育相談担当の先生による指導や支援	**.644**	.129	−.015
授業個別指導	**.388**	.296	.057
家庭訪問	−.195	**.786**	.064
先生たちとの関係改善	.212	**.690**	−.174
保護者への面談	.019	**.650**	.082
電話やメール	.000	**.583**	.071
友人関係を改善するような工夫や指導	.292	**.360**	.102
適応指導教室への通室	−.044	.010	**.785**
教育センター相談室への通室	.128	−.038	**.638**
民間のフリースクールへの通室	−.037	.079	**.463**
病院などの医療機関への通院	.148	.083	**.255**
累積寄与率	40.9	49.2	57.1
α 係数	.822	.807	.663

TABLE 2 自尊感情3得点・将来への自信と中学での支援との関連

	教育相談的支援	積極的登校刺激	専門機関の支援
自己評価・受容	.032	.067*	.044
関係の中での自己	.136**	.146**	.074**
自己主張・決定	.034	.038	.029
将来への自信	.095**	.116**	.123**

***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$ ＋: $p<.1$

への自信〉であった。

このことから，不登校時に有効な（自分にとって役に立ったと思う）支援を受けたという経験が，高校生になっての人間関係における自尊感情と関連し合っているだけでなく，将来の自信にもつながる可能性が示唆された。しかし，相関分析で示された項目間の関連は非常に小さいものであるため，今後も別の角度から検討を重ねることが求められる。

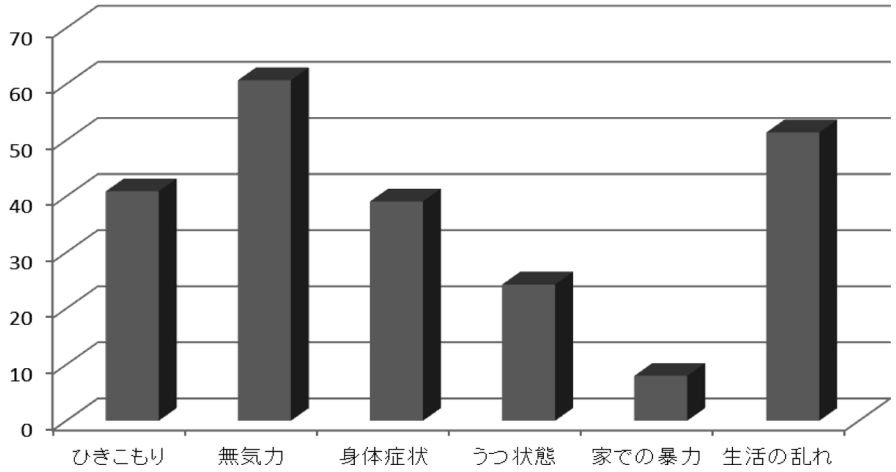

FIGURE 4　不登校時の症状保有率（複数回答%）

TABLE 3　症状の種類の多さと各得点の相関

	自尊感情: 評価と受容	自尊感情: 関係の中の自己	自尊感情: 主張と決定	将来への自信	支援有効度: 教育相談	支援有効度: 登校刺激	支援有効度: 専門機関
症状数	−.195***	−.012	−.049*	−.054*	−.140**	−.290***	−.258**

***: $p<.001$　**: $p<.01$　*: $p<.05$

4.5　休んでいる間の症状

不登校をしている時に抱えていた症状で，あてはまるものすべてを選ぶよう求めた結果（FIGURE 4），「無気力」「生活の乱れ」が5割を超えるものが経験していることがわかった。不登校時に多く経験した症状はその後「ひきこもり」「身体症状」「うつ状態」と続き，「家での暴力」はごく少数にしか見られないことが確認された。

これらの症状のうち「不登校時代」に経験したものの合計数を症状得点とし，それらと自尊感情3得点，将来への自信得点，支援有効度3得点との相関を調べ（TABLE 3），相関係数の絶対値がr＝.100以上のものに注目したところ，自尊感情のうち〈自己評価・受容〉との間で弱い負の関連が見られた。また，支援有効度3得点とは負の相関が有意であることが見出された。これより，不登校時に抱えていた症状が多岐にわたるほど，現在の自己評価も低めの傾向がある一方で，いずれの支援についてもその有効度が低いことが確認された。この点をさらに確認するため，次に，症状によるタイプ間で分類比較を行う。

4.6　症状によるタイプ間比較

先に挙げた6症状の有無の回答結果について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行うと，〈無気力・身体症状・うつ状態〉と，〈ひきこもり・家での暴力・生活の乱れ〉とに分かれることがわかった。しかし，α 係数は低かったため，これらを尺度得点として扱うことはできなかった。そこで，前者

TABLE 4　症状の有無による4タイプ間での得点（平均と標準偏差）と分散分析結果

	ともになしA	内向のみB	外向のみC	ともにありD	主効果 内向	主効果 拒否	交互作用
自己評価・受容	2.51(.60)	2.40(.61)	2.42(.58)	2.23(.62)	24.12***	23.58***	ns
関係の中での自己	2.97(.54)	2.96(.51)	2.86(.52)	2.90(.53)	ns	7.79**	ns
自己主張・決定	2.93(.58)	2.84(.60)	2.82(.57)	2.77(.57)	4.12*	7.90**	ns
将来への自信	2.58(.61)	2.59(.59)	2.47(.55)	2.47(.56)	ns	17.15**	ns
教育相談的支援	2.62(.82)	2.56(.79)	2.70(.82)	2.51(.83)	ns	ns	ns
積極的登校刺激	2.70(.78)	2.47(.80)	2.45(.80)	2.08(.76)	13.47***	16.90***	ns
専門機関による支援	3.00(.77)	2.37(.74)	2.29(.87)	2.04(.81)	7.15**	11.06**	ns

***: $p<.001$　*: $p<.05$
注）多重比較のABCDは「内向外向なし」「内向のみ」「外向のみ」「内向外向あり」を示す。

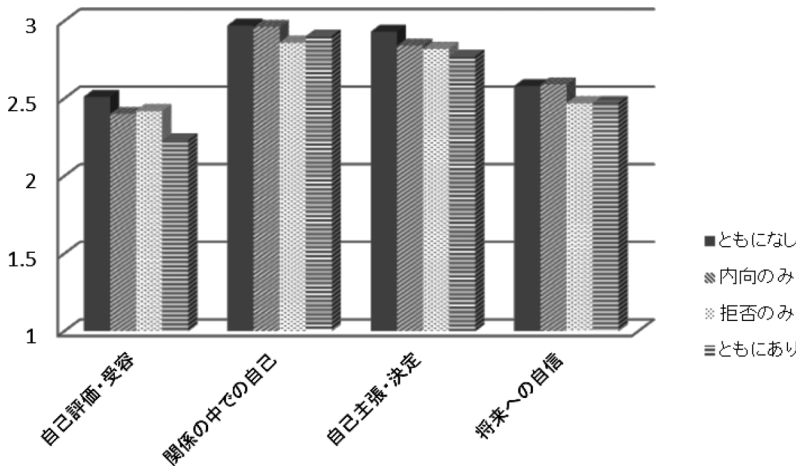

FIGURE 5　症状による4タイプの自尊感情と将来への自信

を〈内向的な性質を持つ症状（内向型症状）〉，後者を〈拒否的な性質を持つ症状（拒否型症状）〉というように操作的に分類する。そのうえで，内向型症状・拒否的症状それぞれが1項目以上ある群とまったくない群とに分類し，それらの組み合わせにより「ともになし」「内向のみ」「外向のみ」「ともにあり」と群分けした。4群間で，自尊感情3得点と将来への自信，支援3得点の平均を調べ，内向型，拒否型を2要因とする分散分析を行った（TABLE 4，FIGURE 5，FIGURE 6）。自尊感情のうち〈自己評価・受容〉と〈自己主張・決定〉については，内向型・拒否型のみの主効果がともに有意で，「ともになし」＞「内向のみ」「拒否のみ」＞「ともになし」という得点差が得られた。〈関係の中での自己〉と〈将来への自信〉については，拒否型とにも主効果が有意で，拒否型症状が少ない「ともになし」「内向のみ」が高く，「拒否のみ」「ともにあり」は低かった。

また支援3得点のうち，教育相談的支援については主効果，交互作用ともに有意ではなかった。積極的登校刺激と専門機関による支援については，内向型・拒否型ともに主効果が有意で，「ともになし」

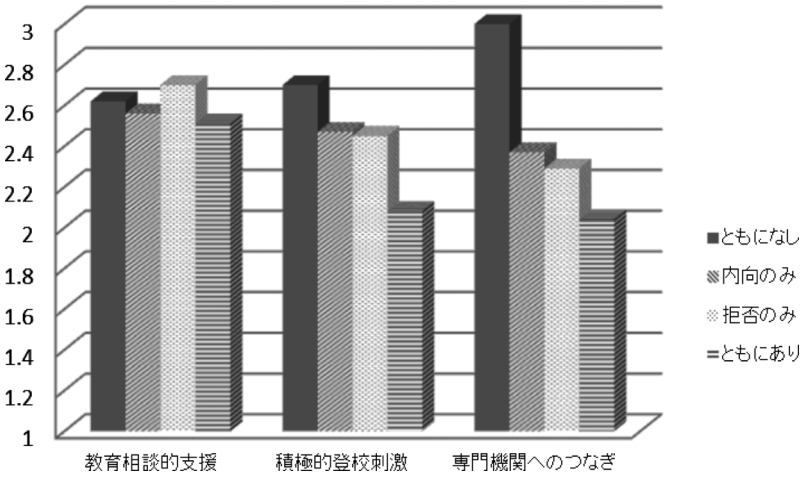

FIGURE 6　症状による4タイプの支援得点

＞「内向のみ」「拒否のみ」＞「ともになし」という順で，得点差は大きかった。

これより，内向型症状であれ拒否型症状であれ，不登校時に多様な症状を抱えていたほど，現在の自尊感情が低くなる。とくに，自己評価・受容や自己主張・決定の2得点については，ひきこもりや生活の乱れという拒否型症状があるほど，より得点が低くなる傾向が見出された。それぞれの症状を多重に抱えていたほど，いずれの支援についても有効性を見出されていないことが確認された。本来であれば，症状が重い不登校については学校内外のリソースを使って支援を行うことが必要とされ，それが有効であると考えられてきた。しかし，今回の結果では，不登校時の症状が多様であるほど，支援の有効度は低く評価されるという方向性が示された。多重な課題を持つ不登校は，支援が十分に機能しにくいという結果は，今後の不登校支援を考える上での課題の一つであると考えられる。

4.7　不登校に対する意識

不登校という体験について「不登校に戻らない」と確信しているものは調査対象者の約半数(49%)，その反対に「いつ戻るかわからない」という不安が強いものは18%，残りの3分の1は「考えないようにしている」と分かれた（FIGURE 7)。

この回答により三分したグループで，自尊感情3得点と将来への自信，支援3得点の平均を求め，群間差を分散分析により調べた（TABLE 5)。その結果，自尊感情3得点と将来への自信については群間差が有意で，いずれも「戻らない」群がもっとも高く，ついで「考えない」，最も低いのが「戻るかも」と意識している群であることが確認された。「考えないようにしている」という群は，不安を抱えつつもそれを抑圧しようとしている状態であり，その不安は「戻らない」と断言できる群に比べると高いものと考えられる。

以上より不登校については，不安要素の高さと自尊感情や将来への自信の低さとが相互に関連していることがわかる。つまり，〈現在〉の自分や〈将来〉に対する自信があるということと，不登校という〈過去〉に対する自信（もう戻らないという自信）とは関連するといえる。他方，支援3得点については有意な群間差は見られなかった。不登校に対する不安は，中学校時代に受けた支援により影響を受け

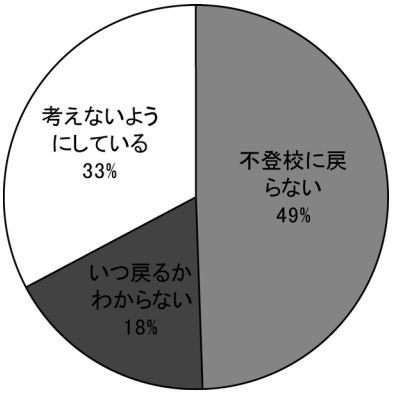

FIGURE 7　不登校に対する意識

TABLE 5　不登校への意識による4タイプ間での得点比較

	戻らない A	戻るかも B	考えない C	分散分析
自己評価・受容	2.49(.56)	2.05(.60)	2.19(.59)	78.82*** B<C<A
関係の中での自己	3.04(.49)	2.70(.52)	2.86(.52)	54.96*** B<C<A
自己主張・決定	2.94(.53)	2.57(.56)	2.71(.58)	58.08*** B<C<A
将来への自信	2.66(.53)	2.27(.58)	2.41(.55)	67.40*** B<C<A
教育相談的支援	2.60(.82)	2.56(.80)	2.53(.81)	.03
積極的登校刺激	2.28(.79)	2.32(.86)	2.12(.76)	2.10
専門機関による支援	2.24(.86)	2.21(.84)	2.10(.74)	.46

***: p<.001　多重比較のA，B，Cはそれぞれ「戻らない」「戻るかも」「考えない」を示す。

ることはほとんどないといえよう。

5.　総合的考察

本調査では，不登校経験を持ち，かつ現在通信制高校（週5日通学するコース）に通っている高校生に，大規模調査を実施した。その結果，不登校のきっかけについては，教師回答による文部科学省の調査結果とは，若干異なるものであった。その大きな違いは，文部科学省の結果では，「いじめ」と「いじめ以外の友人関係」は合わせても2割程度であったのに対し，本調査結果では5割を越える選択率であった。前者が択一式であるという違いを考慮しても明らかな違いであった。友人関係を不登校のきっかけと認知する率は，本人による回答に比べ，教師回答による場合は低めになることが示されており（伊藤，2009），今回の結果もその傾向と符合するものといえる。さらに「勉強がわからない」を選択した生徒も3割を超えた。一方，学校側からはよく指摘される「家庭の問題」については，それほど高い選択率ではなかったが，「家族の生活環境の急激な変化」「親との関係」「家族の不安」を合わせると2割を越える選択率であった。また文部科学省の調査では選択肢に入っていない「ネットやゲームの影響」や「生活の乱れ」についても1～2割の選択率が示され，決して少ない数値ではなかった。不登校

が，鬱や身体症状のような「心の問題」ばかりではなく，「学習の問題」「生活の問題」そして「家庭の問題」が絡み合った結果として生じた現象であることが再確認された。

ところで，今回の結果では「特に思い当たることはない」は5%程度であった。不登校の渦中にいる子どもたちと面談していると，不登校の理由は「よくわからない」と答えられることが多い（伊藤，2009）。しかし，不登校状態を脱し，高校生となった今の段階では，自らが不登校になったきっかけを冷静に判断できていることを意味していよう。

この不登校に対する中学校での支援は，教師による対応，教師外の支援者による対応，学校外の専門機関による対応など多岐にわたり行われていることがわかる。不登校問題に関する調査協力者会議（2003）によると，不登校の11 ～ 13%の通室率と言われた適応指導教室にも3割に近い生徒が通っていたことが判明した。高校に通えている今回の調査対象者については，中学校で不登校をしていた間に適応指導教室等の専門機関による支援を受けていた比率が高いといえ，それら専門機関が果たす成果を示唆するものでもあるといえる。そしてそれ以上に，校内での支援を受けた経験はより多く，かつ多様である。しかし，その有効率（大いに役に立った・ある程度役に立った）が5割を超えたものは，別室登校や保護者への面談，スクールカウンセラー・養護教諭・相談担当教師による支援であった。さらに今回の回答からは，あまり積極的な登校刺激については，生徒本人は歓迎していないことがわかる。しかも分析結果によれば，これらの支援は，（不登校当時の）症状の多さや（現在の）自尊感情や将来への自信とは，弱いながらも負の関連が見られたことが判明した。本人が抱える症状が多いほど支援が必要であると思われるものの，実際にはその症状ゆえに，周りからの支援を拒む者も少なくないことを示唆する結果であると考えられる。支援を受けることが，その後の自尊感情得点にも（ごくわずかながらも）関与することを考えると，より早期に適切な支援に結び付ける方法の確保が重要であろう。

最後に，不登校を乗り越えた高校生たちは，不登校に対してどのような認識を持っているのだろうか。約半数は「もう戻らない」と前向きであるが，他方で「いつ戻るかわからない」「考えないようにしている」と消極的な回答をするものも半数いる。そして，この違いは，現在の自分に対する自信（自尊感情）や将来への自信とも関連がある。現在の生活に居場所を感じ，確かな自信が持てている生徒ほど，過去の不登校を「乗り越えた」という感覚を有していることがわかる。同時に，過去の不登校経験を吹っ切ることで，現在の自分にも将来にも前向きに取り組む自信が出てくるということかもしれない。この結果は，伊藤（印刷中）で示された「現在の自尊感情が高いほど，過去の不登校をプラスの経験だと捉え直す傾向が強い」という結果とも合致する。不登校の渦中にいる子どもたちへの支援についても，きっかけ（過去）を見極め解決を図ることも大切であるが，現在の状況を改善し居場所を確保するような“現在志向的”な関わりも重要であると考えられる。しかし忘れてはならないのが，こうした傾向の一方で，やはり不登校時代を引きずり，今の自分にも将来の自分にも希望を見いだせない生徒が（少数派とはいえ）いるという事実である。またさらに，新しい高等学校の開設などにより，中学で不登校をしていても高校には入りやすくなったという改善がある[2)] 一方で，高校から大学，そして就職まで含めると，社会への敷居はまだまだ高いのも事実である。不登校の最終目標を「社会的自立」と考えるなら，今後は，高校卒業後（社会への自立）をも見据えての支援がますます必要とされるだろう。

註

1)　森田（2003）によると，中学卒業時点で進学したのは全体の65.3%であった。もちろん，不登校のために成績

が十分でなく第一希望に進学できるものばかりではないが，7割近い生徒は進学していく。ところが，進学先を無事卒業・修了した者は進学者のうち58.1％で，中退経験者が4割近くに達することがわかる。また，中学卒業後の進路先について「希望通りだった」と評価する者は37.4％で，何らかの形で「希望通りではなかった」とする者は56.5％を占めた。このように，不登校経験者の進学への道は決して閉ざされてはおらず，不登校経験者がそのまま社会的ひきこもりの状態に直結するわけではないことがわかる。しかし，登校している一般生徒に比べると，不登校経験者の未来は，必ずしも本人の希望通りではない場合も多く，その後の進路変更も少なくない。

2)　実際に，森田(2003)の調査によると，中学で不登校をしていた生徒の約7割は高校進学を果たしていくというデータもある。現在では，この進学率はさらに上昇しているものと考えられる。

引用文献

Anderson, E.& Redman, G. & Rogers, C., 1991 Self-esteem for tots to teens. Parenting & Teaching Publications, Inc.＝荒木紀幸・江里口歓人・山田礼子訳　1999　親から子へ幸せの贈りもの　玉川大学出版部.

青砥恭　2009　ドキュメント高校中退―いま，貧困が生まれる場所　筑摩書房.

紅谷博美　2000　定時制高校における不登校生徒の実態と効果的な援助のあり方(1)　愛媛大学教育実践総合センター紀要，18，79–89.

Callaghan, S., & Joseph, S. 1995 Self-concept and peer victimization among schoolchildren. Personality and Individual Differences, 18, 161–163.

Dreikurs, R. & Cassel, P, 1972 Discipline without tears. Harper & Row.

不登校問題に関する調査研究協力者会議　2003　今後の不登校への対応の在り方について（報告）

Glasser, W. 1969 School without failure. Harper & Row.

Griffin, D. W., & Barthlolomew, K. 1994 Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. Journal of Personality and Social Psychology, 67, 460–445.

Hattie, J. 1992 Silf-concept. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

本間友巳・中川美保子　1997　不登校児童生徒の予後とその規定要因―適応指導教室通室者のフォローアップ　カウンセリング研究，30，142–150.

池谷秀登　2008　生活保護現場からみる子どもの貧困―自立と自己実現に向けた社会福祉事務所の支援　浅井春夫・松本伊智郎・湯澤直美（編）子どもの貧困　明石書房，172–192.

稲垣卓司・和気玲　2007　不登校生徒の通信制高校適応状況の検討　児童青年精神医学とその近接領域，48，155–160.

伊藤美奈子　2000　スクールカウンセラーの仕事　岩波書店.

伊藤美奈子　2009　不登校　その心もようと支援の実際　金子書房.

伊藤美奈子　印刷中　不登校経験者の「過去」「現在」「未来」―チャレンジ高校に在籍する生徒を対象とした調査より―　慶應義塾大学教職課程センター年報，20.

岩元澄子　1996　登校拒否児の学校適応という視点からの予後予測　児童青年精神医学とその近接領域，37，331–344.

粕谷貴志・河村茂雄　2004　中学生の学校不適応とソーシャル・スキルおよび自尊感情との関連―不登校群と一般群との比較　カウンセリング研究，37(2)，107–114.

川俣理恵・河村茂雄　2007　中学で長期不登校を経験した女子生徒への高校相談室での居場所づくりを基盤とした援助　カウンセリング研究，40(4)，287–294.

小泉隆平　2006　学校と居場所―高等学校での支援を中心に　忠井俊明・本間友己（編）不登校・ひきこもりと居場所　ミネルヴァ書房.

水田一郎　2007　高校生の不登校　齋藤万比古（編）　不登校対応ハンドブック　中山書房，234–240.

門眞一郎　1994　登校拒否の転帰―追跡調査の批判的再検討　児童青年精神医学とその近接領域，35，297–307.

森田洋司　2003　不登校―その後　教育開発研究所.

村田昌俊・三浦務・武田公孝・林耕司・朝倉明美・伊藤健治・群司竜平　2000　登校拒否（不登校）学級卒業生のその後　障害情緒教育研究紀要（北海道教育大学），19，61–68.

大高一則・若林慎一郎・本城秀次・金子寿子・榎本和・大井正己・杉山登志郎・阿部徳一郎　1986　登校拒否の追跡調査について　児童青年精神医学とその近接領域，27，213–229.
Oleus, D. 1992 Victimization by peer: Antecedents and long-term outcomes. In K. H. Rubin & J. B. Asendorpf (Eds.), Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood. Hillcdale, NJ: Erlbaum. 315–341.
斎藤環　1998　社会的ひきこもり―終わらない思春期　PHP研究所.
齋藤環　2007　思春期ポストモダン―成熟はいかにして可能か　幻冬舎.
齊藤万比古　2000　不登校の病院内学級中学校卒業後10年間の追跡研究　児童青年精神医学とその近接領域，41，377–399.
高橋歩　2010　不登校経験への意味づけに関するPAC分析　日本教育心理学会第52回総会論文集，536.
田中輝美　2009　キャリア発達という視点から見た高校生の不登校　カウンセリング研究，　42，361–368.
Tennen, H., & Herzberger, S. 1987 Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 72–80.
都筑学　2009　中学校から高校への学校移行と時間的展望　ナカニシヤ出版.
鶴岡舞　2012　高等学校における不登校支援に関する研究―不登校経験者が多数入学するチャレンジスクールでの取り組みに着目して―　慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻　修士論文.
山本隆一郎・齋田頌子・大月友　2009　男子高校生との心理相談―不適応の背景にある青年期課題　カウンセリング研究，42(4)，332–341.
渡辺位　1983　登校拒否の予後　臨床精神医学，12，851–856.

附表1　東京都版自尊感情尺度

私は今の自分に満足している（A）
人の意見を素直に聞くことができる（B）
人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる（C）
私は自分のことが好きである（A）
私は人のために力を尽くしたい（B）
自分の中には様々な可能性がある（C）
自分はダメな人間だと思うことがある（A＃）
私はほかの人の気持ちになることができる（B）
私は自分の判断や行動を信じることができる（C）
私は自分という存在を大切に思える（A）
私には自分のことを理解してくれる人がいる（B）
私は自分の長所も短所もよく分かっている（C）
私は今の自分は嫌いだ（A＃）
人に迷惑がかからないよう，いったん決めたことには責任を持って取り組む（B）
私には誰にも負けないもの（こと）がある（C）
自分には良いところがある（A）
自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している（B）
私は自分のことは自分で決めたいと思う（C）
自分は誰の役にも立っていないと思う（A＃）
私には自分のことを必要としてくれる人がいる（B）
私は自分の個性を大事にしたい（C）
私は人と同じくらい価値のある人間である（A）
A：自己評価・受容　B：関係の中の自己　C：自己主張・決定　＃：反転項目